

蔣介石の同胞殺しは日本の百倍

捏造に過ぎない「南京大虐殺」を史実だと主張する人は、支那事変がどんな戦争だったか実相を知らないか、知っていてもあえて無視する人々だ。「日本は迷惑をかけた。謝罪しなければならぬ」と主張する日本人も同様である。

支那事変を「日中戦争」と呼び変えるのは、事実の半分を隠蔽する行為である。支那事変は表向き、日本軍と蔣介石率いる国民政府軍の間の戦争であったが、実態は支那人が支那人を虐殺した戦争であった。

これはわたしの独断ではない。中華人民共和国成立後、周恩来首相の下で副首相を務めた郭沫若が嘆いている。郭沫若は支那事変が始まってのち、国民党軍事委員会政治部第三庁の長官として文化宣伝に従事していた。その郭沫若が、昭和三十四年に日本で翻訳出版した『抗日戦回想録』（原題『洪波曲』）で断言する。

《話だけでも胸の痛むことだ。あんなふうになれわれは、やれ動員だ、やれ抗戦だといって、しかも毎日毎日「最後の勝利は必ずわれらのもの」などとくりかえしていたが、抗戦八年の間に、いわゆる壮丁から弱丁へ、弱丁から病丁へ、病丁から死丁へというふうにして踏みにじられた同胞の数は、戦死したり日本の侵略者に虐殺されたりしたものの少なく

とも百倍以上はあつただろう。私はそいいいきることができる》

飢えた人々の食糧を奪う

蒋介石がどれほど支那の民衆、庶民を踏みつけにしたか、残酷の見本のような目撃証言例が、アメリカ人記者の回想記にいくつも出てくる。少し拾ってみる。

盧溝橋事件から一年が過ぎた一九三八年八月のことである。すでに河南省の開封を占領していた日本の北支那方面軍は、一部がさらに西の鄭州南方の平漢鐵路まで進出した。

慌てた蒋介石軍は日本軍を食い止めるため、中牟県というところで黄河の堤防を破壊した。このため濁流が東南の平原に流れ込み、周辺の村々だけでなく、安徽省、江蘇省の一部を水浸しにした。蒋介石軍に従軍して破壊現場を目撃したアメリカ人記者のジャック・ベルデンは『中国は世界をゆるがす』（安藤次郎他訳）で、《このようにしてかれは、十一の都市と四千の村とを水没させ、二百万の農民を宿なしにしたが、ともかく日本軍を停止させた》と述べている。

日本軍は停止したが、これは軍隊の責任を無辜の庶民に押し付けただけのこと過ぎなかった。住みかど生業を奪われた二百万人は食べ物もなく、悲惨のどん底に叩きこまれた。ベルデンは、三年後の一九四一年の夏から秋にかけて再びこの地方を訪れて歩き回り、

復興が進んでいるかどうか確かめようとした。

しかし、復興どころではなかった。予想外の光景を眼にする。

《来る日も来る日も、荒れ果てた土地、休閒状態の畑、朽ちて倒れかかった人の住まぬ家が並んでいるのを、道を歩きながら見ていると、気が滅入る思いがした。まだひどい旱魃かんばつが起こつていないところが少なくなかったので、なぜ畑が見捨てられているのかわからなくて困った。そのとき百姓たちは、国民党の徴税吏と蔣介石軍の徴発吏たちが収穫以上の穀物を要求するために、祖先の田地を立ち去ったのだとわたしに話してくれた。労働の果実がことごとく取り上げられてしまうだけでなく、要求された税に収穫が追いつかないために殴られたり牢屋にぶちこまれるのでは、どうして働くことができようか？》

国民党は支援どころか、災害に苦しむ農民から過酷な税を取り立てようとした。ために農民は畑を放棄して山のなかに逃げ込んだというのだ。

この地方は呪われた土地だったのか。ベルデンが立ち去った翌年、一九四二年には大旱魃が襲った。さらにその翌年、一九四三年の二月末から三月にかけて、今度はアメリカの雑誌『タイム』のセオドル・ホワイト記者ともう一人の記者がやってきた。そのときの様子、ホワイトは後年に出す『歴史の探求』（堀たお子訳）で述べている。

犬が、人が、人肉を食う

現場に来てホワイトが最初に目撃した光景の一つは、地獄絵だった。

《死体があつた。洛陽らくやうを出てから一時間も経たぬうちに、雪の中に横たわる死体があつた。死後一、二日だろうか。その顔は頭蓋のまわりに萎しぼんでいた。たぶん若い女性だったにちがいない。雪はその眼の上にも降り積っていた。埋葬もされぬまま、ついには鳥や犬が骨までしゃぶるだろう。

犬どもも道端にたむろしていたが、狼の天性に戻ったか、毛並も艶やかでよく肥えていた。われわれは、砂の山から死体を掘り出している犬どもの写真を撮ろうと馬を止めた。なかには半分食べかけのもあつたが、犬ははつきりそれとわかる頭蓋骨をきれいにつつき終わっていた》

この世のものとも思えない残酷な場面を生んだ原因は、先にベルデンが聞き知つたのと同じだった。

《ちょうど近頃の世論調査員がやるように、每晚私は土地の官吏と話したあと、克明に記録をつけた。そして私が得た結論は、中国政府がその人民を死にいたらしめた、あるいは愚かにも人民を餓死させたという一点に尽きた。政府は抗日戦を戦っていた。そのために

情け容赦なく税を取り立てた。それも、政府が自国の紙幣を信用しないので、戦地の政府軍は穀物などで税を取り立てて軍を維持するよう指示されていたのだ（ある将校は私にこういった。「たとえ民衆が死んでも土地は中国のものだ。だが兵士が飢え死にしたら土地は日本軍に奪われてしまう」）

「国家に民衆は不要」と言い切ったこの将校の言い草は、土地と兵隊があれば国は成り立つとする錯覚であり、蒋介石が発動した抗日戦なるものの愚かさを浮き彫りにしている。

ホワイトは続ける。

《河南省では、軍隊は土地の収穫高を上回る穀物税を取り立てた。文字通り田畑を空にしたのである。軍隊は、穀物が余っている地域から穀物を運んでこようとはしなかった。つまり人びとの食生活を完全に無視したのだ》

ホワイトは、身の毛もよだつ恐ろしい噂を耳にした。

《このような悲惨を私は見てきたが、耳にした最悪の話は人喰いの事実があるということだった。人間が人間を殺して食べるなど、見たこともなかったし、まして人肉を味わったことなどない。だがこれは、論駁ろんぱくの余地ない真実と見えた。たいていの場合、人肉を死体からとるというのが、言い訳になっていた。われわれが記事にしようとした件はどれもこれも、それが弁解の手であった。

ある村では、母親が二歳になる実の子を茹でてその肉を食べたことが発覚した。二人の息子を絞殺して食べたために告発されたという件もある。また、貧しい子を預かるようにと軍に命令されて、ある農夫が八歳の少年を預かった。ところがいつの間にか少年の姿が見えない。調べてみると、農夫の小屋の傍の大きなかめの中から少年の骨が出てきた。問題は、少年が死んでから食べられたのか、殺されたのちに食べられたのかという点だった》

ホワイトの当時の推定によると、黄河堤の破壊のあと、洪水被害を受けた四十の県には依然、八百万人が生存していると思われた。しかし、《私の最終的な計算では、五百万人が死んだか、死につつあるということになった》。

騙し、おびき出して皆殺し

蒋介石は人々をいったん安心させ、警戒心を緩めさせておいて騙まし討ちにかける手を繰り返し用いた。いくつもの例が記録されているが、ここではもう一度、ベルデンの報告を聞こう。

ベルデンは第二次世界大戦が終わったあと、蒋介石の国民党軍と毛沢東もうたくとうが率いる共産軍の間で始まった国共内戦の初期にも河南を訪れ、蒋介石軍が民衆を騙し討ちにかけた事実